

第1回「子母澤寛文学賞」「愛猿記賞」の選評

選考委員長 佐藤勝彦

第1回「子母澤寛文学賞」（短編小説部門）並びに「愛猿記賞」（エッセイ部門）の作品募集に際して、短編小説134点、エッセイ147点、合計283点の応募がありました。

男女比で見ますと、短編小説部門が男性7割、女性3割。エッセイ部門が男性6割、女性4割となり、どちらも男性の応募作品が多い結果となりました。

応募者の年齢構成は、短編小説部門では21歳～89歳で、その平均は60歳。エッセイ部門では29歳～92歳で、その平均は62歳で、いずれも幅広い年齢層から応募をいただきました。

応募作品の選考方法は、短編小説部門とエッセイ部門に分け、実行委員会による下読みを実施し、合議の上で選考委員会に推薦する作品を選定しました。

その後、選考委員各自により各部門の大賞及び佳作にふさわしい作品を選出させていただき、その結果を踏まえ各賞が決まりました。

選考委員会の決定により、短編小説部門では、大賞の該当作品はなし、田崎つゆ子氏の「憂ターン」と、広瀬智子氏の「母さんと鮭と海」の2作品が佳作となりました。

エッセイ部門では、前田恭子氏の「『愛猿記』を読んで」が大賞に選ばれ、たけだみつえ氏の「愛を紡ぐ人 子母澤寛」と、金泉三恵子氏の「子母澤寛氏の心」の2作品が佳作に決まりました。

【短篇小説部門の選評】

「子母澤寛文学賞」佳作

田崎つゆ子氏の「憂ターン」

現代日本が抱える大きな社会問題である高齢化社会を老人特有の病状や介護の視点でとらえた優れた作品です。そこには、若い頃には考えもしなかった、介護体験が切実な課題として描かれています。身につまされる思いで読まれる方も多いのではないかと思います。

何とみすばらしい夢を見るものだろう。喉がひりひりと渴き不快だ。この数年で、五、六回、同じ場面同じ設定で朝方に限って見る。朝見た夢は尾を引く。

僕が小川に沿った小道を歩いていると硬貨が幾つも落ちている。次々と硬貨を拾って進むと、不器用に折りたたまれた紙幣も落ちている。紙幣はもちろん、

硬貨も泥で汚れているがそんなことは構わない。僕は嬉しさに胸を躍らせながら
らどンドン小道を辿って……

いつも夢はそこまで。その先はない。

言いようのない卑小感が起床後もしばらく続く。誰にも話したことはない。

この出だしが、「優ターン」そのものを想像させます。うまい出だしです。

主人公「僕」の生家は石川県の山村で、そこで一人暮らしをしている認知症
の母親を面倒見るために、名古屋から優ターンする「僕」の物語です。

製薬会社の研究員として定年 60 歳まで勤めあげ、老齢年金が支給される 65
歳まで後 5 年は一研究員として開発部に残ることが約束されていた。ところが、
定年を迎える 60 歳の年に母親の認知症が発症して、どうしても田舎に帰らざ
るを得なくなる。妻は、染色の講師として家で教室を開いているため、おいそ
れととは一緒にはいけない。

製薬会社での開発研究に未練を残し、家に妻を残し、一人村に帰る「僕」は、
正にタイトルのように憂鬱なUターン、ここから主人公「僕」の葛藤が始まり
ます。この心的描写である葛藤がこの短篇小説の一つの山場になることを読み
手に推測させます。

高齢者介護は今日的テーマであり、多くの家族が直面する家族問題です。こ
の作品では、母親と「僕」、「僕」と妻という家族関係において、小説として最
も重要な人間の本性「エゴ」が十分に描き切れていない点が惜しまれます。

小説には、棘が必要と言われています。人間の本性である「エゴ」を書きき
ることも、この棘にあたります。読み手の心に何か引っかかる、忘れようとし
ても忘れられない棘が読み手の心に引っかかる、気になる、考えさせられる、
等々の余韻が必要ではないかと思います。作家の島尾敏夫さん私小説『死の棘』
になると、棘も死に至らしめる強烈な印象を読み手に与えますが、ここまでの
棘は常人では描き切れません。書き手にとっての「棘」を意識することは、大
切と思われれます。

「子母澤寛文学賞」佳作

広瀬智子氏の「母さんと鮭と海」

題名と話の展開がよく練られており、読者を惹きつける優れた作品です。

書き出しはこうです。

「死んだら海にまいて、後生だから」

病院のベッドのうえで、「ちょっとジュース買ってきて」と言うのと同じくらい
の気安さで、母さんは口にした。

母親の遺言である「海への散骨」をめぐる物語であり、主人公の「私」と母親との関係、「私」と職場（役場）の人間関係、「私」と役場職員の彼（のちに結婚）との関係、そして、散骨する海が、母親の故郷である漁村（厚田の海を思わせる記述）、その漁村で偶然出会う漁師夫妻が、自分の母親のことを知っていて、そこで母親の過去の秘密が明かされる。

結婚した彼と無事、海への散骨を終えて、次のように文章が結ばれます。

「母さんの命日には海を見に行こう」

私は、チャンチャン焼きでさらにでっばったお腹をさすって提案した。

「千絵のお母さんだったら、こう言いそうじゃない？ 私がずっと同じところにいると思う？ 海の水は世界中を巡回しているの。あんたが来年見に来て、私はそこにいないわよ、ってね」

高橋くんが母さんの口ぶりを真似るように言う。

「それもそうね」

「じゃあ、母さんの命日には鮭をたらふく食べるってことで」

「いいね」

「ムニエル、フライ、石狩鍋……」

その方が、母さんの供養になる。そういう供養なら毎年欠かさず出来そうだ。

へその緒をなくした母と、遺骨を手放した娘——それでも私たちは切れない紐でつながっている。

平易な文章の中に、若者の視点で捉える職場の人間関係の描写には皮肉とユーモアを交えたスマートな展開、母子家庭で育った娘の両親への思い、母親の死、そして母親の故郷で知らされる母親の秘密、そして結婚と、短編の中に人生の主要なテーマをぎっしり詰め込んだ展開、一気に読ませる文章であり内容でしたが、この作品の山場ともいえる散骨の舞台となった北海道の漁村及び人物描写にリアリティが希薄だったことや人物相互の力関係（人間関係）に筆が十分に届いていなかったことが悔やまれます。30枚程度の短編小説の場合、大きな山場はせいぜい一カ所程度、その山場での人物描写、心理描写をどのように描くか、更にはその山場のプロットをどこに仕掛けるか、平坦な道を淡々と描くのではなく、大きな山場を意識して、読み手の心に突き刺さる棘をどこに、どのように仕掛けるかがこの作品を大賞に手が届くかどうかの分岐点になったように思われます。

【エッセイ部門の選評】

「愛猿記賞」大賞

前田恭子氏の「『愛猿記』を読んで」

エッセイの本質は、「その人でなければ書けないもの」と言われています。「書き手の人柄（個性）が滲み出た、教養や品格に裏打ちされた格調の高い文章であるかどうか問われる」のが、エッセイだと思います。

選考委員の一人・森厚さんも、エッセイの魅力について「身の出来事を肩の力を抜いた自然体の文章で書く。その中に読者を惹きつける“面白さ”が輝いていること」と述べています。

この場合の“面白さ”は、「面白い」の語源・由来を彷彿とさせる内容でなければいけません。「面白い」の「面」は目の前を意味し、「面白い」の「白」は明るくはっきりしていること、即ち、目の前が明るくなった状態を表しています。従って、「内容が面白い」というのは、眼の前を明るく照らし、未来が開ける文章のことを意味します。

こうした視点から見ると、エッセイ部門の大賞に選ばれた、前田恭子氏の「『愛猿記』を読んで」は、まさに子母澤寛氏の人柄・人間性を彷彿とさせる映像的文章で書かれています。

寛氏は大変な動物好きで、猿以外にも、犬や小鳥を飼い、家族同様に愛情を注ぎ「愛猿記」に登場する、お猿の三ちゃんとは、お風呂に一緒に入る家族でした。

この「愛猿記」を読んだ、前田恭子氏も大変な動物好き。そして、人と動物との関わりを「愛猿記」を介して、ご自身の心情を綴った、愛情溢れた作品と言えます。前田氏は、「愛猿記」を読み「愛」の姿を究極まで表現したエッセイだと書いています。その書き出しと結びの文章は、それぞれ次のように綴られています。

書き出し——「文学賞のパンフレットで、お顔を初めて拝見してから子母澤寛の人となりを知った。黒ぶち眼鏡の奥の瞳は慈悲深く優しい目をして、こちらを見ている。」

結び——「エッセイを読み終えて再び見た寛の顔は菩薩になっていた。」

書き出しと、それを受ける形で表現された結びの文章は、子母澤寛氏の人柄・人間性を彷彿とさせる素晴らしいエッセイでした。

「愛猿記賞」佳作

たけだみつえ氏 「愛を紡ぐ人 子母澤寛」

「恥ずかしながら、子母澤寛という小説家の名を知らなかった。」という書き

出で、寛氏との出会いを初々しく描いた素敵なエッセイです。

最後の方の文章には、「生きとし生けるものへの愛—それが子母澤文学の原点だとしたら、幼少期に祖父母、とり分け祖父からもたらされた無償の愛こそが、彼を小説家へと導いたのではないだろうか。」と書かれています。

「祖父からもたらされた無償の愛」という、二人の関係性をもう少し具体的な事例で語ってくれれば、次の「彼を小説家へと導いた」という説得力が増すのではないかと思います。更に欲を言えば、エッセイは、一行一行に詰め込む濃密な内容の文体と丁寧な語彙表現が必要になります。益々のご活躍をご期待申し上げます。

「愛猿記賞」佳作

金泉三恵子氏 「子母澤寛氏の心」

「古書店で手にした一冊の本。「愛猿記」昭和 63 年文春文庫出版で、初版本なのだ。作者は子母澤寛氏。黄ばんだ 1 冊の本との出会いが、私の人生を変えた。」という書き出しは、一見大げさな表現と思われるが、「人生を変えた」というフレーズが、読み手に期待を持たせます。「どう変えたのだ？」という期待が大きいだけに、展開が難しくなります。

その展開には、寛氏の三ちゃんとの別れ、寛氏の両親との別離、人間の心の中の光と影が書き込まれていきます。

そして、金泉さんは末尾で、『愛猿記』を読んで、私は、死に向かっている命を、真剣に考えるようになった。66 歳で難病を抱える私に、残された時間は限られている。この世で縁ある人・犬・亀・花の命に感謝し、愛を尽くして生きて行きたい。」と作品を結んでいます。

まさに、書き出しの期待を裏切らない内容でした。

作者はまた、宗教についても触れ、「猿が死んだ時は、法華経の寿量品を唱え、成仏を御祈念する。」と書き、慈悲深い心を寛氏と共有しています。

作者は、生け花作家であることが書かれています。文章の中に季節の花などの情景描写を入れることによって、作者の内面的描写を文章の“間”として描き、生きとし生けるものへの慈悲が読者に伝わるのではないかと思います。次回もまた期待しております。